

月刊 労働千葉



国鉄千葉動力車労働組合

〒280 千葉市要町2番8号(動力車会館)
電話 (鉄電) 千葉 2935・2936 番
(公) 千葉 (22) 7207 番

1989.11 No.2950

闘春



国鉄千葉動力車労働組合
執行委員長 中野洋

昨年十二月五日、中央線東
中野駅で発生した衝撃的電車
追突事故の余韻を残し、一九
八九年があけた。

この半年間、JRでは、八
月東北線、九月八戸線、十月
上越線と、国鉄時代には考え
られないような重大事故が毎
月発生し、とうとう二名の尊
い生命が犠牲となり、百名を
超す重軽傷者を出す大惨事を
ひきおこすに至ったのである。

これら一連の事故は、いま
なお続く「分割・民営化」攻
撃の必然的帰結であり、起る
べくして起ったものである。

考えてもみよう。わずか二
年ほどの間に十万人もの要員
削減を強行し、極限的労働条
件と、無謀なダイヤ設定、命
令と服従、差別と選別の労務
管理、執ような組合潰し、恐
怖政治が横行し、職場は窒息
状態となり、最大の使命であ

る「安全」が重大かつ深刻な
危機にさらされることは当然
のことではないか。

これら事故の全責任は、山
之内（JR東日本副社長）一
革マル松崎にある。この両者
が異常極まりない経営施策の
急先ぼうとなり、「脱線車両
があるから注意運転せよ」、
スピードアップー時間短縮、
ATS取り扱いの改悪、場内
信号冒進の教唆、などを平然
と行なっているのである。ま
さに「安全哲学」は崩壊しつ
つある。

すでに「分割・民営化」体
制の破綻、累積債務のサラ金
地獄化、しつこくと化した清
算事業団、鉄道年金、整備新
幹線、さらに、鉄道労連の破
産、革マル対旧鉄労グループ
の対立激化など、JR一革マ
ル鉄道労連体制を根底から激
震させている。

いよいよ反撃に打って出る
闘いの春（とき）が到来した。
東中野駅事故を二度とおこ
してはならない。
いまこそ、動労千葉は自らと
乗客の生命を守るため、断固
として、反合・運転保安闘争
に総決起しなければならぬ。
十年前の一九七九年、われ
われは、動労千葉を結成し、
「八〇年代に通用する自前の
労働運動」路線を確立し、幾
多の実力闘争を敢行し、団結
を堅持してきた。

この十年間、世界は大きく
揺れ動き、一九九〇年代が世
界的大不況と大恐慌、戦争と
革命の時代であることを告げ
知らせている。こうした中で
日帝は、戦後的「平和と民主
主義」をも自ら打ち破り、天
皇制、天皇イデオロギーを前
面に、むき出しの階級支配、
戦争体制づくりに向け突っ走
ってきた。

社会党・総評ブロックの全
面的屈服、転向は五五年体制
の終えん！戦後的枠組みの崩
壊を物語っている。今まさに、
日本労働運動は、天皇Xデー
攻撃との対決、大変な勇気と
思想が問われる時代となる。
動労千葉は「反連合」「反
統一労組懇」の先頭にたち、
「自力・自前・自闘・連帯」
のスローガンを高々と掲げ、
全組合員・一族が一丸となっ

て巳のごとく執念をもってし
ぶとく闘いぬこう。

闘いの任務と方針は、「分
割・民営化体制」粉砕の総路
線のもと、反合・運転保安確
立の闘いに全力をあげ、「六
四・三」ダイヤ改阻止に向け、
同時に不当解雇二八名、清算
事業団十二名の奪還に向けス
ト体制を確立することである。
そして、革マル鉄道労連を解
体し、動労総連合の拡大・強
化に全力をあげ「反連合、反
統一労組懇」の全国労組、活
動家交流センター」の二月結
成と、動労千葉結成十周年記
念行事の圧倒的成功をかちと
ることである。

また、物販と「檄」上映運
動をテコに闘う仲間との連帯
強化をかちとり、「三里塚」
「天皇」を中心とする反戦政
治闘争の強化をかちとること
である。

そして、何よりも組織・財
政基盤を確立しよう。被解雇
者は全組合員の先頭にたち、
「全員が活動家に」を合言葉
に、支部、分科、青年部、家
族会のさらなる強化と、営業
清算事業団支部の結成をかち
とろう。

私はその先頭で闘う決意で
ある。

一九八九年一月一日

中野洋